

**総合科学技術会議**  
**第 21 回科学技術システム改革専門調査会議事録**

日時 17 年 7 月 22 日 ( 金 ) 10 : 30 ~ 11 : 54

場所 中央合同庁舎 4 号館 4 階 共用第 4 特別会議室

出席者：岸本議員（会長）、阿部議員、薬師寺議員、柘植議員（主査）

黒田議員、松本議員

梶谷委員、國井委員、倉田委員、小館委員、清水委員、

知野委員、中西委員、本庶委員、本田委員、三浦委員

欠席者：吉野議員、黒川議員

齊藤委員、鈴木委員、若杉委員

事務局：林統括官、塩沢審議官、清水審議官、渡邊参事官 他

- 1 . 開 会
- 2 . 出席者紹介
- 3 . 議 題
  - ( 1 ) 科学技術連携施策群運営の基本的考え方
  - ( 2 ) 科学技術システム改革専門調査会の進め方等について
  - ( 3 ) その他
- 4 . 閉 会

( 配布資料 )

資料 1 科学技術連携施策群運営の基本的考え方

資料 2 平成 17 年度科学技術関係予算の改革について

( 平成 16 年 7 月 23 日 総合科学技術会議 )

資料 3 科学技術連携施策群

資料 4 科学技術連携施策群の推進体制

資料 5 科学技術システム改革専門調査会の進め方等について

参考 1 各連携施策群のイメージ図

参考 2 科学技術システム改革専門調査会運営規則

参考 3 科学技術連携施策群に含まれる施策等

参考 4 各ワーキンググループ会合の開催状況

○ 岸本会長

それでは、定刻になりましたので、ただいまより第 21 回科学技術システム改革専門調査会を開催させていただきます。本日はお忙しいところ、暑い中を御参集いただきましてありがとうございます。

総合科学技術会議では、本年度より科学技術連携施策群という新しいシステムを創設いたしました。これは、各府省の科学技術政策に横串を通し、科学技術予算の重複排除、連携強化を行うことによって効率よく成果を上げていくということを目指してまいります。

ポストゲノム、新興・再興感染症、あるいは次世代ロボット、燃料電池等、8つのプロジェクトについて連携施策群を立ち上げました。この施策が有効に優れた成果を上げることができるよう、いろいろな御意見をお聞きするという事でこの専門調査会を立ち上げました。

8つの連携施策群のコーディネーターの先生方とともに、有識者の方々をお願いをいたしまして、13名の専門委員の先生方をお願いをいたしました。本日は最初の会でありまして、棚橋大臣にもお越しいただいておりますので、まず最初に大臣からご挨拶をお願いいたしたいと思っております。

棚橋大臣

科学技術システム改革専門調査会の開会に当たり、一言ご挨拶を申し上げます。

専門調査会の委員の先生方におかれましては、大変御多忙な中、御参集いただきまして本当にありがとうございます。今、岸本会長からもお話がございましたように、本専門調査会で御議論いただきます科学技術連携施策群につきましては、昨年、総合科学技術会議におきまして国家的、社会的に重要なテーマについて、各府省の縦割りの弊害を排し、重複を排除して連携強化を図りつつ、積極的、効果的に推進するという趣旨で創設をさせていただきました。

各テーマごとにコーディネーターの方々を中心に、有識者の先生方と協力して取り組んでいただくという連携施策群の仕組みをこういう形で稼働させるのは初めての試みでございますが、各方面からも大変高い注目をいただいているのではないかと考えております。また、同時にその関心にこたえるためにも、体制の整備についての課題も多いのではないかと考えております。

このような課題につきまして、本専門調査会で今後積極的な議論を展開していただきますことをお願い申し上げます。

7月15日に皆様方を専門委員として任命させていただき、記者発表させていただきましたが、本日をもって本格的な活動がスタートすることとなっております。特に今後連携が強化され、各テーマの研究が効果的に行われるよう、私も積極的に取り組んでまいります。御列席の専門調査会の委員の諸先生方のお力添えは私どもにとりま

して大きな助けとなりますので、是非御指導賜りますことをお願い申し上げまして、ご挨拶に代えさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

岸本会長

ありがとうございました。

それでは、本専門調査会の会長は私が務めておりますが、今回議論の対象となる科学技術連携施策群の議論については、マネジメント手法の在り方などに詳しい柘植委員に主査をお願いしておりますので、進行役を柘植議員をお願いしたいと思います。よろしく申し上げます。

柘植座長

柘植でございます。科学技術連携施策群についての議論の主査を務めさせていただきます。

初めに、専門委員を始め、御出席の皆さん方の御紹介をさせていただきます。お手元に座席表がございますが、委員の方々はあいうえお順で御紹介させていただきます。

梶山文彦委員でございます。川崎医療福祉大学教授でナノバイオを担当していただいています。

今日はまだ御出席いただいておりませんが、國井秀子委員、株式会社リコー常務執行役員・ソフトウェア研究開発本部長でございます。

倉田毅委員、国立感染症研究所所長でございます。感染症の連携施策群を担当していただいております。

小箆香椎子委員、日本女子大学理学部教授であります。

続きまして清水勇委員、工業所有権情報・研修館理事長で地域クラスターを担当していただいております。

続きまして知野恵子委員、読売新聞社編集局解説部次長であります。

中西友子委員、東京大学大学院農学生命科学研究科教授であります。

続きまして本庶佑委員、京都大学大学院医学研究科特任教授、ポストゲノムを担当していただいております。

次に本田國昭委員、大阪ガス株式会社技術部門理事、水素利用・燃料電池を担当していただいております。

続きまして三浦宏文委員、工学院大学の学長でございます。次世代ロボットを担当していただいております。

あとは、大臣を始め総合科学技術会議の議員が出席しておりますが、加えまして3人の審議官が同席しております。この中で、特に清水一治審議官は連携施策群担当の審議官でございます。よろしくお願いいたします。

以上のほか、今日御欠席になっております齊藤忠夫委員、鈴木基之委員及び若杉隆

平委員を専門委員としてお願いをしております。以上、御紹介をさせていただきました。

( 國井委員入室 )

柘植座長

國井さん、今、委員の御紹介をしているところですので、駆け付け慌ただしいのですが御紹介させていただきます。國井秀子委員でございます。

それでは本題に入りますが、その前に、先ほど大臣からも言及いただきました科学技術連携施策群のマネジメントについて、主査として一言申し上げたいと思います。御案内のとおり、この科学技術連携施策群は今年の総合科学技術会議の本会議において、科学技術関係予算改革の一環としてその創設、それから積極的な推進、これを決定いたしました。総合科学技術会議は司令塔機能を発揮するための一つの目玉として注目しているところでございます。コーディネーターの方々を始め、皆様方の御見識を十分に発揮していただきたいと考えております。

各テーマごとの目標達成に向けて、不必要な重複の排除とか、連携を強化する優れた成果を生み出すためのシステムとして知恵を絞っていききたいところでございますが、初めての試みでございまして課題も多々あると思います。

私の産業界での技術経営の経験からしまして、今回の連携施策群のマネジメントはいわば会社の場合ですとインタービジネスユニット間の技術経営マネジメントと言えます。各ビジネスユニット、国の場合ですと府省になりますが、その責任において自由に任せるべき軸と、コーポレートとして連携施策群の場合は内閣府になると思いますが、横串のマネジメントをせねばならない。軸の両輪を上手に回していくことが、科学技術政策投資を国民と社会に還元する道であり、これが肝要と考えております。

そういうことで、本専門調査会での検討を踏まえてよりよいシステムを、何としてもこれは連携施策群の成功であったと評価を受けるとなりたいと考えております。

本日は第1回の議論でございまして、本専門調査会の進め方についての提案のほか、科学技術連携施策群の考え方、基本的な考え方を事務局から説明をして、御質疑の後、討論に入りたいと思います。それでは、事務局お願いします。

渡邊参事官

それでは、配付資料の確認と若干の説明をさせていただきます。

お手元の配付資料一覧にございますように、資料1から5までと参考資料として4つ付けさせていただいております。

資料1は連携施策群運営の基本的な考え方をまとめたものでございます。

「目的」につきましては、先ほどからお話がありますように、国家的に重要なテー

マにつきまして各府省がいろいろ取り組んでいるわけですが、これに関して横串を通して不必要な重複の排除、連携の強化等を図って、効果的に研究を推進しているというものでございます。

これにつきまして定めましたものが資料2で、昨年7月にそういった趣旨でこの連携施策群を創設したということです。

テーマにつきましては、資料1に8つ掲げております。ポストゲノムから地域科学技術クラスターまで8つです。

2番目の「運営方法」ですが、専門的な見地からこの関連施策の調整を実施していく必要がありますので、当該研究分野に高い識見を有する研究者の方々にコーディネーターをお願いしております。

各連携施策群の調整作業ですが、コーディネーターの方及びその連携施策群に入ります各研究に係る各府省あるいは研究所の方々、そのほか当該分野の専門家などをメンバーとしてワーキンググループというものを構成し、そのワーキンググループ会合において調整をしていくということを考えております。コーディネーターのイニシアチブの下に各連携施策群の全体として研究が効果的になるように、重複の排除などの調整を行っていくものです。

コーディネーターを中心とする活動を支援するために、コーディネーターとともに作業を行うスタッフ、研究関係の方及び事務担当ということですが、これを置いております。タスクフォースと呼んでおります。また、オフィスを富国生命ビルの23階に置きまして、日常的な打合せあるいは各研究の関係者からのヒアリング等を実施していきたいというものです。

連携施策群全体としての検討を行うということで、本専門調査会を置きまして、この中で連携施策群について調査検討を行うことといたしまして、コーディネーターの方々にその他の有識者の先生方に専門委員をお願いしたという次第です。

3では、連携施策群の活動を具体的にイメージして並べております。

まずワーキンググループの会合でありますとかタスクフォースの会合におきまして、連携施策群ごとに研究の目標、方向性といったものを設定していただきまして、同時にその連携施策群に含まれる研究の内容をいろいろと精査していただく。それによりまして、連携施策群のマネジメントの方法でありますとか研究の構成の在り方、あるいは連携強化、重複排除、または欠落している部分といったものの補完、こういったものなどにつきまして検討いただきまして、その目標の効果的な実現のための具体策といったことで調整をしていただく。

各府省の概算要求に関わるものについては、各府省がそのワーキンググループにおける検討に基づきまして研究内容を修正、これは重複の排除あるいは連携の強化をして修正して、いい形にして概算要求をしていただくということを考えております。また、この専門調査会との関係ですが、各群のマネジメントの状況あるいは調整過程で

生じた課題につきまして、この専門調査会に報告していただき、検討していただいております。

また、欠落部分、新たに研究を実施した方がよいという部分があった場合には、コーディネーターのイニシアチブによって研究テーマを定めていただき、科学技術振興調整費を活用して調査研究を行いたいというものです。

また、ワーキンググループ会合等におきまして各連携群のマネジメントとか、連携状況等について毎年度フォローをして評価をしていただき、それをこの専門調査会に報告して検討していただいております。

資料3は先ほどの8つの連携施策群のテーマについて簡単な目標や主な関係省庁を並べたものです。

資料4は、この連携施策群の推進体制について図示したもので、左側のだいたい色のところにあるのが本システム改革専門調査会ということです。これとは別に、ワーキンググループというものを真ん中の方に8つ、各群ごとに設けまして、実質的な検討はこちらでしていただく。それに、関係府省と内閣府が事務局として支援させていただくという形でございます。

資料5はこのシステム調査会の進め方について事務局の方で簡単に御提案させていただいている次第です。

まず「専門調査会開催の趣旨」ですが、この科学技術連携施策群という新たな手法、初めての試みですので、これを円滑に推進していくために必要な調査検討を行っていただいております。

「主な調査、検討事項」ですが、この新たな手法について、より優れた成果を生み出す研究開発システムにするための検討をしていただいております。具体的には、各連携施策群のマネジメント状況や、ワーキンググループ会合における調整等の過程で抽出された課題のうち、全体的な事項について調査会で検討していただいております。

また、調査検討の結果については、必要に応じて取りまとめていただき、それを総合科学技術会議の本会議に報告するという形にしてはどうかと考えております。

3番目に「調査、検討の進め方」ですが、この専門調査会の開催については、基本的に1つ目が概算要求後のタイミング、このタイミングで概算要求までの各群のマネジメントの状況あるいは調整過程で生じた課題等について検討をする。また、年度初めのタイミング、これは前年度のマネジメント状況の総括評価、次年度の活動計画の検討、こういったことをしていただく。この2つのタイミングを基本といたしまして、更に必要に応じて開催していただいております。

参考1は、各群の研究テーマの状況を図示したものです。

参考2は、システム調査会の運営規則です。

参考3ですが、この連携施策群に含まれる具体的な各府省あるいは研究機関の研究

施策を並べたものでございます。

参考4ですが、各ワーキンググループの会合が既に始まっているところもでございます。新興・再興感染症のワーキンググループ、ナノバイオテクノロジーのワーキンググループが既に第1回目を開いております。その他のグループにつきましても日程が決まっております。以上で説明を終わらせていただきます。

柘植座長

ありがとうございます。いろいろ御議論がございましょうが、とりあえず今の事務局の説明につきまして質問をまず承りたいと思います。何かございますか。

では、後ほど議論に入りますが、そのときにまた質問でもよろしいかと思っておりますので、進めさせていただきます。今の最後の紙でワーキンググループ会合の開催状況が書かれておりますが、既に一部ワーキンググループ会合が開催されたところがございます。これを含めまして、各連携施策群のコーディネーターの方から御発言をお願いしたいと思っております。コーディネーターの方で担当されている群の研究の現状、今後の運営などについて、マネジメント方針なり、あるいは潜在的な問題等、そういう実ケースに基づきましてお感じになっている点があるかと思っております。これも含めまして、コーディネーターから御発言がいただけたらと思っております。よろしく願います。

7月13日に新興・再興感染症ワーキンググループが開かれたそうでございますけれども、口火に倉田委員いかがでしょうか。

倉田委員

13日に第1回目の会合を開きました。それで、私の準備不手際もあったのですが、いわゆる各省庁でどのようなことが行われているかということで、そういう資料を集めたいということが最初の希望だったのですが、いろいろなルールがあるようで、そのところをちょっと軽く見ていたところもありますが、ずっと資料が出てくることではなさそうでしたので、そのところは少し方向転換をして必要十分な情報が入ればいいという方向に変えてやってみなければいけないと思っております。

それで、参考1の2ページにございますが、感染症の分野というのは非常に広く深く、人間に直接関わるものがありますが、特に最近のいろいろな問題は、ワーキンググループのメンバーをいずれ見ていただければわかりますが、人獣共通感染症と申しますか、厚生省の用語では動物由来感染症と言っていますが、こういう野生動物、昆虫等から入ってくる感染症が非常に大きな比率を占めております。特にこの30年間で登場した感染症の7割は全部この動物からきているということで、非常に重要なポイントです。

それで、そこにありますように、このポイントは文科省も厚生労働省も農水省も共

同して仕事をしていかないと、各々の解釈でやっているとかかなり進み方も悪かろうし、効率的にならないということは確かにございます。

ただ、感染症の分野に注がれているお金というのは、ほかの分野と違いまして非常に小さなもので、これを本来効率的に連絡強化していくためにはそれなりの費用も必要であろうし、もっとそのところが人の健康を守るためには重要であるということで、ワーキンググループのメンバーの意見も現在そのトピックである、例えば鳥インフルエンザですね。毎日新聞に出るくらいにぎわせていますが、そういうものだけに絞らないで、少し広く物を見て対応する方がいいのではないかと。

というのは、40年くらい前にポリオが大騒ぎになったときに、当時としてはそれなりに大きな研究費が世界で流れましたが、そのとき実際にポリオに直接使われた費用は3割くらいで、あとはその周辺がその後の細胞生物学から感染症の基礎研究に非常に貢献したということがございます。

そういうことで、現在トピックスとして鳥インフルエンザであるとか、SARSであるとか、ウエストナイルであるとか、これはメディア的にも、また皆さんの健康にも直接関心がくるわけですが、そういうものを含めて更に感染症の今の問題にリストアップされていないものも含めた基礎的なことも考えたらどうかという意見が大部分ございました。

それも今、問題になっているところから入って行って、いずれそういうふうになって、基礎も深く、幅も広くということにいけば非常にいい。そのときに、単なる感染症という考え方からではなくて周辺の科学ですね。そういうものが非常に今までも貢献してきましたので、そういうところからの応援も得ていけば、またそれなりに進むと考えております。そういう意味で、今回のワーキンググループではどういう連携をするかということについて皆さんの意見をいただき、更に補充の意見を皆さんから文章で送っていただいて、連携強化は非常に重要である。どうやるかについて、お題目にならないようにきちんとしたやり方を考えましょうということで、昨日きた文章のところまではそういうことで進んでおります。

外国につきましては、文科省の方で拠点形成が行われますので、そういうところと厚生労働省で、分野によっては農水の方々も一緒にやっていただければ、この問題はかなりいい結果が得られるのではないかと。

特に今、毎日騒がれている鳥インフルエンザの問題は最前線が東南アジアであります。その前線のところである程度のことをしない限り、日本にはずっと入ってくるのではないかとということで監視も重要ですが、それをサポートする科学技術も非常に重要で、そのところは筆頭に考えております。以上です。

柘植座長

ありがとうございます。4月20日にはナノバイオテクノロジーのワーキンググループ

プが開かれたということですが、梶谷委員から一言いただけますか。

梶谷委員

先日、阿部議員の御出席をいただきまして第1回の会合を開催したところであります。

ナノバイオテクノロジーの連携群は、ナノテクノロジーとバイオの融合領域における研究開発の成果を早期に実用化する。健康寿命の延伸と新産業の創出、それから国際競争力の確保を図って豊かな健康社会の実現を目指すということを基本にしております。

この目標達成のために、ナノテクノロジーを応用した薬物の送達システム、デバイス、それから分子イメージング等を柱として、医療分野のほかに機能性食品や環境測定用マイクロチップなど、食料、環境分野においても基礎研究から実用化まで一貫した施策の連携を図っていきたいと考えております。

会合では、20ある対象施策の概要と、それから各省庁が現在まとめておられますロードマップ等の作成状況についてのヒアリングを行いました。

更にお集まりいただいた5名の有識者から、この連携群の目標をどうしたらいいかというふうなディスカッションをしていただいたのでありますが、ゴールを明確にしてもらいたい。そして、ナノは目的ではなくて手段であるといった話、それから当然のことではありますが、異分野との積極的な協力体制を強力に進めていただきたい。それから、スピードである。あとは、問題点を明確にしながら進んでいってほしいといったことが提案されたように思います。

今後は、関係各府省の主だった施策の実効性からのヒアリングを重ねて、本年度実行されている施策について詳しく把握をしていきたいと思っております。以上でございます。

柘植座長

ありがとうございます。ほかのコーディネーターの方々、これから遭遇されるであろう問題点等をいろいろお考えだと思うのですけれども、何か懸念事項なり、あるいは問題提起なりございますか。

本田委員はまだこれからでございますが、いかがなものでしょうか。

本田委員

活動の中に、科学技術振興調整費を使って欠落部分であるとか、やるべきことでできていないことを公募してやろうということで一つのテーマとして挙げられているわけですが、お聞きしておりますと金額的には全体で10億程度というようなことで、多いと言えば多いし、少ないと言えば少ないのではないかと。

ただ、8つのテーマに分けますと結構小さな数字ですけれども、そういうふうな公募をするようなテーマにつきまして、それぞれのワーキングで既にお話が出てきているのか、またそういうテーマに関したときに今、予算されている金額というものが妥当と思われているのかどうか。そういうようなお話が出ていたとしたらお聞かせいただけたら、私の方も次のワーキンググループのときには参考にさせていただけるのではないかと思いますので、議論があったかどうかお教えいただければ幸いです。

#### 柘植座長

まだ2つのワーキンググループしか開かれていませんが、梶谷委員、倉田委員、今の点はどうでしょうか。いわゆる全体を俯瞰的に見たときに、これは予算的にゴールに向かっていけるだろうか。あるいは、これからの作業を俯瞰的に見たときに多分欠落部分というものが出てくると思うんです。その辺りはこれからの課題かもしれないんですけれども、何か予見されるようなことはございますか。

#### 倉田委員

1つは、新興・再興感染症の分野の研究費の単位というのは非常に小さいんです。そういう意味では今、言われた金額からでもある程度問題を進める上には非常に有効であるとは考えています。ただ、連携を強化して更にいろいろつくるためにはもっとフレキシビリティのある予算があれば、それは連携強化に非常につながると思います。先ほど言うのを忘れたのですが、各省庁のヒアリングというものは漠とした総論的なお話はお聞きしているのですが、更に細かなところに突っ込んで具体的に進めるためには、具体的なものに関するいろいろな研究内容なり、そういうものが資料として欲しいと思っています。それはまた個々の申請書は最も分かりやすいのですが、ダメな時は、そういうものと違った格好でも内容が把握できるようなものをお願いしたいと考えています。

#### 梶谷委員

全体的に見ますと、ナノバイオというのはかなり国の方からバックアップしていただいていると思います。そういった点はやはりもう少しロードマップをきっちりして、はっきりしてから足りない分ということなんですけれども、私は今年の予算ではまずかなり十分ではないかと思っています。あとは、調査のための調査研究というものが少しできれば、もっと有効なロードマップが書けるのではないかという気がいたします。

あとは、ルーチンの仕事に対しては少し予算が少ないのではないかという意見が我々のグループの中ではございましたけれども、これも事情がございますから、予算の中でやらせていただきたいと思っています。

柘植座長

調査研究の充実、特に第3期に向けてベンチマーキングという軸にかなり重きを置いてございまして、やはりそこところは人も金もかけていく必要があると私自身も感じております。コーディネーターの方、ほかにいかがでしょうか。

清水委員

私は、参考資料1の8ページにある地域科学技術クラスターのコーディネーターの清水でございます。

ここで取り上げられるクラスターとは、日本にシリコンバレーをつくらうというような話から、地域の産業活性化まで、かなりスペクトルの広い話でございます。実際には既に文部科学省が知的クラスター創成事業等、経済産業省も産業クラスター事業ということで既に推進しています。実は私自身地域科学技術の振興のための委員会の委員をやらせていただいた折りに最初に出ましたのが「省庁ごとの横串を差さないと、重複が激しくてなかなか成果が上がらないのではないか」という委員の意見でした。

その後、文部科学省と経済産業省の2つのプロジェクトに関して言えば、今日では両者は緊密に連携し、お互いの透き間を埋めるような話まで進んでいるということで、霞ヶ関主導でもマネージできるのではないかというような印象を受けています。図らずもコーディネーターを拝命し、具体的にその成果を上げなければならないとしますと、「霞ヶ関でやるマクロな施策と、それぞれの地方の実利に基づくミクロな施策をうまくドッキングさせる」ことなどが検討の対象になるでしょう。実際に行うことはなかなかそう簡単なものでもないでしょうが。

もう一つはそれぞれのクラスターで実践される研究テーマが、他の施策群のものと重複している可能性があるので、個々の問題については意見を交換させていただくことは効果的であると期待しています。

8月2日にワーキンググループをやるつもりでございますので、ここの委員会の雰囲気はお伝えしておきます。以上です。

柘植座長

ありがとうございます。ほかにいかがなものでしょうか。三浦委員、一言お願いできますか。

三浦委員

次世代ロボットを担当しています三浦でございます。

参考資料の4ページにございますが、ロボットは、今、非常に話題になっていますけれども、いろいろ難しい問題があります。例えば、愛知万博のロボット週間が先月

ありましたけれども、報道を見てもロボット技術はいっぱい開発されていることはよく分かります。皆が、いいロボットができていますねと言うのだけれども、役立つロボットができましたねとは一言も言ってくれないです。ロボット技術はいっぱいあるけれども、ロボット製品は何もないじゃないですかと言われるのです。

昔の工業用ロボットというのはむしろロボットと言ってはいけないので、自動機械だと私は言っているのです。それはたくさん働いています。自動車工場などでどんどん働いている。それはロボットというより高級な自動機械が役立っているという話で、次世代ロボットという以上は何となく皆もっと違うものをイメージしていると思います。それが実際に役立った例はあまりないです。

しかし、国家プロジェクトとしてはもう二十数年前から始まっていて、最初の大型プロジェクトは極限作業ロボットというものがあって、例えば原子力発電所の中を4本足のロボットが走り回って、方々の故障を直したり、検査をしたりするというところでいろいろな漫画がかかれたりしました。私はその最終評価委員会の委員長というものに選ばれたのだけれども、最終のデモンストレーションのときにちゃんと仕上がった4本足ロボットがパイプもまたぎ、階段も昇りました。それが、原子力発電所を模擬した環境でスパナを持ってナットを回そうとしたらスパナを落としてしまったのです。そうしたら、もう拾えないのですね。じっとたたずんで終わってしまったのだけれども、本当にロボットはそんなこともできないのかということがいっぱいあります。

ここで共通プラットフォームという言葉が出ていますが、これも最近終わったヒューマノイドロボットのときに出了のだけれども、最初の2年間は2本足ロボットという共通プラットフォームをつくる研究に費やして、あとはこういう2本足のいいものができたからどう使いますかというようなことで研究テーマを公募したわけです。そうすると、こんな使い方があるとかいろいろ言うのだけれども、例えば車両を運転するロボットとか、2本足である必要はないというようなことがいっぱいあるのです。

また、家庭の中に入りますよというのですが、家庭の中に入ったら、例えば携帯電話でカーテンを締め忘れたから開けておいてくれという連絡をすると、ロボットが行ってカーテンを上手に開けるのですけれども、そんなことはカーテンレールのところにちょっとモーターを付けておけばいいので、そういうとんちんかんことが多いのです。

しかし、各省庁がかなり古くからやっておられまして、実際にロボットが役に立つのかどうかということをもう一遍真剣に考えていただきたい。ロボットは皆が面白がって、こういうことに役立つよということはいっぱいありますから、そういう重複をどのようにうまく整理できるかということで、国家のロボットプロジェクトに最初からずっとタッチしてきている谷江和雄（首都大学東京教授）さんにこのタスクフォースに入ってもらっているいろいろヒアリングなどをしてもらおうつもりです。不必要な重複

をどう消すかというところは難しいところだと思っているんですけども、役立ったねというロボットを1つでもつくりたいです。そんなところです。

柘植座長

ありがとうございます。次世代ロボットの連携施策ということで、どうも今の三浦委員のお話はほかの施策群も参考にさせてもらえる部分、レッスンラウンドが随分あるのではないかと。あるいは、学ぶべきことですね。やはり20年、国が投じてきても現状であるというものが、それはノーマルである部分もあるかと思うし、あるいはやはり改善すればもっとよくなる部分もあると思います。そうすると、改善というのが先ほど清水委員がマクロ施策とミクロ施策のマッチングというキーワードをおっしゃいましたけれども、そういう観点での改善なのか、あるいは別な切り口での改善なのか。今のロボット技術を早く役に立たせるという話の問題提起から、随分この専門調査会で共通に学ぶべきものが出てきそうなことを期待していますので、是非そういう面でお願ひしたいと思います。

三浦委員

わかりました。努力します。

柘植座長

ほかのコーディネーターの方、いかがでしょうか。本庶委員、今のところで一言お願ひします。

本庶委員

私はポストゲノムを担当することになっておりますが、これはほかの分野と比べて非常に大きな問題がございます。それはポストゲノム、健康科学の推進ということは、言ってみれば感染症を除いたバイオロジー全部を含むような内容でございます、事実この施策のリストを見ましても、ページ数が一番多いということがおわかりいただけると思います。

したがいまして、このワーキンググループでいきなりこれをやるためには非常に大きな問題があると考えまして、一応私と補佐の方とで各省庁からの案件を全部キーワードで整理統合し直して、一応重複しているものを9つくらいキャンディデートとして抽出いたしました。

しかし、非常に大きな問題は分野が広いので、この施策群として各省庁からリストアップされているものだけでは全体像になっていないという大きな問題があります。バイオに関係するほかの施策がいっぱいあるけれども、必ずしも全部がこの連携施策群としてリストアップされているわけではない。

その中で、例えば先ほどございましたように欠けている分野に重点投資をするという場合、この中だけで欠けているという判断でいいのか。国全体の施策の中で当然考えなければいけないので、その辺の情報をどうやって集めていくか。非常に苦渋をしているという状況でございます。本日、第1回のワーキンググループを午後からやる予定でございます。以上でございます。

柘植座長

ありがとうございます。私は全く門外漢ですが、今の本席委員のおっしゃったことは、まさにこのポストゲノムの課題が非常にとんでもない巨大システムという言葉は妥当かどうかわかりませんが、これを科学技術の面から構築して、最終的な出口というか、社会へ還元していく。私は機械屋でございますが、巨大システムを白紙から構築して社会に役に立つようにするという設計、製造能力というものは日本人は今まで成功したことがあるだろうか。こういうふうにも、御発言を受け取っております。非常に難問ですが、このポストゲノムの連携施策を今のところ苦渋されているのを何とか切り開いていただくと、ほかの連携施策、あるいはこれから出てきます連携施策にも十分その設計、製造指針として学ぶべきことはあるというふうにも話を承りましたので、よろしく願いいたします。

本席委員

うまくいけばですね。

柘植座長

一通り連携施策群としてのコーディネーターのお話をいただきましたが、有識者として、特に技術マネジメントの有識者として委員に参加していただいております方々を含めまして意見交換に入りたいと思います。特に今日は初回でございます。冒頭事務局から申し上げたように、本専門調査会の進め方ですね。資料5で今日は案として先ほど御説明しました進め方について特に御意見、これにこだわらず全般にわたりますの自由な御意見を承りたいと思います。特に中西委員、知野委員、小館委員につきましては、全体を俯瞰して見ていただいてこの連携施策群の全体をまとめていく本専門調査会の進め方についてアドバイスいただけたらと思っております。

國井委員

システムの連携について、非常に重要な課題で取り組みも大変だと思うんですけども、私自身の企業の中での研究開発の経験から申し上げて、こういうタイプのテーマに関しては最初に“what”のところを十分検討することが重要かと思います。特に私はIT分野ですが、IT分野で言うとまず要求工学というか、何をすべきかが

重要です。先ほどのロボットのお話でも少し課題が出ておりましたけれども、いろいろな可能性がある中で本当に役に立つというか、国民にとって利益になるものというのは何かが重要で、代替案があってもっと簡単にできる技術を一生懸命やってみようがないわけです。

そして、一番困っているテーマに優先順位を付けてやっていかなければいけないわけですが、それが何となくわかっているようでいて、議論をしていくと優先順位がいろいろな要素技術についてあいまいになってくることがシステム的设计の中で多いと思います。ですから、最初の議論で何をねらっていくのか、何をやるべきかというところの判断基準が明りょうになるようにホワットの議論を十分していただくと、その後、全体に効率がいいかと思います。

やはり上流工程をまず押さえる。どうしても技術系の研究者は先ずものをつくりたいということで技術の議論が先にいってしまうんですけれども、そうすると後でほかにもっといい代替案があってもっと簡単にできることがあったのではないかという話がしばしば出てまいりますので、私の経験から言うと、上流工程に相当な時間を使ったり、リソースを使っていた方がいいのではないかと思います。以上です。

#### 柘植座長

私も産業経験者からしますと、今の國井委員のおっしゃったことは全く同感でございます。上流工程に時間とリソースを注入して要求事項の明確化、当然その中にはプライオリティを付けていくことと、そのアクセプタンス・クライテリアというものもやはり時間が長くかかるものにしても途中でのアクセプタンス・クライテリアというものはやはりあると思うんです。

これは、一種の産業がフロントローディングに十分リソースをかけておくと後が楽になってくる。アフターローディングになってくると、工程なりお金はどんどんかかってきてしまう。そういう経験は全く今の御指摘のとおりでございます。これは連携施策群の今の時点で非常に我々はかみしめて必要なリソースを、先ほど梶谷委員から調査研究費が少し足りないのではないかとありましたが、私はやはりそこは金と時間、人をかけていいのではないかと。今の國井委員の御指摘を満たすフロントローディングをしっかりするという意味で、これを是非反映をしたいと思います。

では、中西委員どうぞ。

#### 中西委員

今、本席先生がおっしゃいましたように分野によってはその規模がものすごく大きかったり、小さかったりいろいろなものが含まれるのですが、是非ベンチマーク、世界の中でどんなふうな位置を占めていて、これからどういう技術を開発すべきかというようなことも頭に入れていただけたらと思います。

あとは、各分野が夢のある分野に育っていくにはどういうことが必要かということも考えていただきたいと思います。と言いますのも、夢がある、何かありそうだ、魅力的だとなりますと若い人が自然と集まってきます。分野育成のためには予算面も大切ですが、若い人がどれくらい集まるかということもその分野が発展するかどうかのメルクマールになると思いますので、是非加味していただければと思います。

#### 柘植座長

今のベンチマーク、世界のポジショニングをしっかりとっていくという話は先ほどの國井委員からの御指摘とも絡んでくると思うんです。こういう面で今の各連携施策群を俯瞰したときに、まだ上流工程に時間をかける、リソースをかけることが不足であることが顕在化してきましたら、是非とも今の時期にその分、お金と人を投入するようなことをマネージしていただきたいと思います。

若い人も集まってくるといのは、多分今のフロントローディングをしっかりとっていくことで若い人から見えやすくなってくると思うんです。そうすると、若い人は優秀ですし、燃えてきますから参加したい、パティシペイションしたいという意欲をかき立てるにもフロントローディング、今、中西委員がおっしゃったベンチマーキング、世界のポジショニングというものははっきりさせることが大事かと思えます。

いかがでしょうか。知野委員どうぞ。

#### 知野委員

今は国が科学技術予算を重点的に投資しているが、かなりそれが特定分野でダブっているのではないかという思いを持っています。それで、省庁間でダブリが結構出ているのではないかというふうに我々国民の側としては見ているわけですがけれども、そういう中で縦割りや重複をなくそうというのは非常に意義のある試みだと思います。

ただ、問題は、では実際にどうやっていくか。これは平成 18 年度予算の概算要求の後に調整するということになっていきますけれども、それがダブっていた場合にどういう調整をされるのか。例えば別の項目に置き換えるということなのか、あるいはそれをどこかの役所が要求をやめてしまうという形にするのか。その辺がポイントかと思っております。例えば、これをほかのものに置き換えてみたというだけならば、単に名目を変えてまたダブっているのではないかという気がするんです。その辺のところをどうするのかということが1つです。

それから、先ほど三浦先生のお話にもありましたけれども、日本の場合、技術や研究というのは非常によくやっていて、いろいろ研究開発成果をため込んでいるんだけど、それが実用に結び付いていくというところで何か止まっているような気がするんです。ですから、重複を排除するときに実用にどうつなげていくかというような視点がかかり打ち出されていくようなシステムづくりができればいいのではない

かと思っています。

#### 柘植座長

今2点、私は技術マネジメント上とあえて言いたいんですけども、国の科学技術マネジメント上、非常に大事な御指摘があったと思います。これで連携施策群のマネジメントの施策のポイントの一つの、いわゆる重複排除という面がこれからの各コーディネーターの御指導で掘り下げていったときに、御指摘のようなシチュエーションが出てくると思うんです。

そのときに、私はその内容自身、つまりA省庁の方はもうやめるという話が理論上はあると思うんですけども、恐らく私は各コーディネーターのマネジメントをしていきますと、そのリソースをこちらの方に使おう。そうすると、2番目の御指摘のストックはあるんだけどフローになっていない。あるいは、実用化までの道にまだここが欠けているというのが、フロントローディングを先ほど國井委員がおっしゃったことをきちんとやっていくと、まだまだリソースが足りない部分が出てくると思うんです。

そこのところはケース・バイ・ケースですので、恐らく私はそういう道が出てくるのではないかと。これはやめて、こちらは生かせばいいというようなゼロイチの世界ではないのではないかと想定しますが、今の1点目、2点目の話というのはそういう意味で抱き合わせで、私は今後この連携施策群のマネジメントは今の視点を保ちながら、具体的にそれが顕在化したときに各連携施策群ごとでそれを処理していく。あるいは、どうしてもその処理ができないような構造的な障害がもしバジェティングも含めてあるならば、この専門調査会で共通の問題として取り上げていく。そういうようなプロセスにしておきたいと考えたいと思うんですけども、いかがなものでしょうか。

#### 塩沢審議官

今の御質問に、より事務的に答えるならば、ダブりの排除のようなものはこの連携施策群をやることによってどういう分野に他の省庁がどういう施策を今、講じようとしているかということについての情報流通についての基本的なプラットフォームはもうできておりますので、そういったものを踏まえて概算要求が行われるということは1つだと思います。

仮に概算要求の段階で重複していたものが出てきた場合には、私どもSABC評価ということで各省の予算の科学技術的観点あるいは政策上の必要な観点から評価をすることをしております。その中で我々の評価を行い、仮に重複していたような、無駄な重複というのは言葉としてはややトートロジーですけども、仮に無駄な重複があった場合には当然その評価を低くすることによって来年度予算に反映をするということになると考えております。

それから、成果につなげる方策についてもお話があったので、これも今どういう仕組みを我々が持っているかということだけ申し上げますと、最近評価をかなりしっかりとやってきていると私どもは思っております。これは、評価の際には当然当該プロジェクトあるいは当該施策を実施することによって得られる効果というものをあらかじめ明確にして、それと実際施策によって達成されるであろう効果というものを外部の有識者の方々にも入っていただいて評価をするということで、そういった仕組み、メカニズムによって世の中が少しずつ変わっていくことを目指しているということでございます。

#### 柘植座長

今の塩沢審議官は、我々総合科学技術会議のデイリーのオペレーションの中である程度そのメカニズムは働いておりますが、しかし、現実問題として先ほどの本庶委員のおっしゃるような重複が9件ほど浮かび上がってきているとかということが実際にあるわけです。

ですから、よく見ていきますと、今の塩沢審議官の言ったデイリーのオペレーションのままでは科学技術予算の本当の有効な使い方というものはまだまだマネージする余地があるということも事実だと思しますので、先ほど申し上げたように、やはりこれは連携施策のマネジメントの中で各論で、具体論でそれをやっていく役目が相当出てくるという認識が正しいのではないかと私は思っています。

いかがなものでしょうか。小館委員から今までの御経験からしまして失敗要因などというものの予測をしていただけたらありがたいんですけども。

#### 小館委員

従来にないこういう科学技術システムの連携をしながら、非常に強力で日本の科学技術を推進していくという試みは今まで多くの関係のある方たち、あるいは国の人たちが期待をしていて、実現がしにくかったことが積極的にこういう展開になったということは、私ども大学人にとっても大変大きな期待のあるところでございます。

ただ、本当にワーキンググループをコーディネートしていかれる責任のある方たちが大変なことをこれから抱えていかれるので、具体的にになったときの調整のところでどの程度の御議論がどういう形で展開されるのか。

それから、今日の参考資料の4のところに第1回目のそれぞれのワーキンググループの会合の開催状態が記載をさせていただきますけれども、このワーキンググループをどのぐらいの頻度でなさって、それをまたどういうふうにフィードバックをかけて進めていかれるのか。ここに非常に御努力とお時間をかけていただかなければいけないのではないかと感じております。

それから、先ほど中西先生の方からも御発言がございましたけれども、こういった

試みが非常に夢がある分野を育てるということと、若い人たちに科学技術に非常に大きな関心を持っていただく機会とするために、こういった試みが今、行われているということの広報活動をどういう形で、いつの時点でお出しただけなのかというようなことですね。例えば、連携したポストゲノムならばポストゲノムに関しまして、大変大きい各省庁間にまたがった縦断的なシンポジウムの開催とか、具体的に見える形にさせていただくことが、今この中で各省庁間のいろいろな調整をしなければいけない問題をも改修していく一つのきっかけになるのではないかと。

ある意味で情報というか、中身の公開をしていただきながら、そういったものを取り入れた形でワーキンググループを進めていただく。非常に大変なお骨折りになるかと思えますけれども、そういうことを期待したいと思っておりますし、どこのグループのところにもお書きになっていらっしゃる、それぞれの分野における人材育成というような視点も、より取り込んでいただくと、私ども教育に関わる者としては更に期待も膨らむ気がしております。よろしく申し上げます。

柘植座長

大変重要なことを御指摘いただいたと思います。特に1点目の、今までこの辺りはうまくいかなかった。それはインプリシットかもしれません。そういうことに対する取り組みもあえて挑戦を始めたわけでして、期待とともに本当にそれが実現する。エフェクティブにするためには相当ワーキンググループの頻度プラス質も高めるようなマネジメントを本当にしていかないと、やはり看板倒れになってしまうということのサゼスションだと思います。この辺りは、ほかのコーディネーターの方から御意見がありましたら後で伺いたいと思います。

2点目の見える化といいますか、広報活動も含めて見える化をしていくことでこの連携施策群がプラスのスパイラルを描いていく。その一環の中で人も育てていく。このプラスのスパイラル構造をつくっていく広報活動も含めた工夫ということを御指摘いただいたと思うんですけれども、1点目に戻る前に広報活動について今、事務局は何か構想を考えておられますか。これから工夫するということですか。

渡邊参事官

具体的にはまだ考えておりませんが、そういったことは大いに可能ですので考えていきたいと思っております。

柘植座長

1点目のワーキンググループの質と量の向上という形につきまして、コーディネーターのどなたかからサゼスションいただけることはございますか。

企業での技術マネジメントに苦労されてきた本田委員、今の御指摘はいかがでしょう

うか。

本田委員

今までお話があった中で幾つかまとめてお話をしたいと思います。

まず、ずっとお話の中で重複の排除という言葉がよく出ておりますけれども、より正しく言えば不必要な重複の排除でして、必要な重複は大いにこれからもあり得ると思います。そういう面では、ただ重複だけしか見えていなかったとすれば、それが必要な重複であるか、不必要な重複であるかを明確にしていくというのは我々コーディネーターだったり、ワーキングの責任でもあると思いますので、そういう方向でしていきたいと思っております。

また、私が担当させていただく燃料電池の分野につきましては、ジェミニやアポロの時代から、もう30年くらい前からリン酸型であるとか、熔融炭酸であるとか、いろいろな分野で数多くのプロジェクトがあり、また国の方も多くの予算を費やしてきていただいております。その中で、残念ながらまだどれも本格的な商品として実用化していないというのが現状です。

では、なぜそうなったのかということについて今回我々は十分にワーキンググループでも議論をしながら今、新しく、ひょっとしたらバブルが少し通り過ぎているところかもしれないかもしれませんが、固体高分子型の燃料電池につきましてはこの研究というテーマからもう一歩、二歩進んで開発、そして商品化の支援という分野にも注力して、国のそういう予算であるとか、その他の応援が得られるような方向で進めていけたらと思っております。それから、いろいろとお話を聞いておりますと、これもしなければいかぬ、あれもしなければいかぬということがたくさん出てくるわけですが、やはり限られた時間だと思えますし、これから10年、20年かけてすることもあるかもしれませんし、ここ3年、4年でしなければならぬということの中で、はっきり言いついてこういう制度ができたのが今回初めてということでもありますし、こういうふうなそれぞれの立場になっている我々としまして初めてのことでありますので、そこのところは今ここでどうしましょう、こうしようということが言えないのは残念でもあるし、申し訳ないとも思いますが、これからそういうことが明らかにできるように進めていくということだと思っております。

そして、その広報活動につきましても、我々燃料電池水素の分野におきまして事務局の皆さんとお話をしておりますのは、今まで例えば燃料電池水素でNEDOさんなどはその分野だけの成果報告会であるとか年次報告会をしておりますけれども、それぞれ他の省庁さんではテーマが少ないためになかなかそういう機会がないということもありますので、今回はそういう燃料電池水素という一つのテーマにまとめて、各省庁連携の部分であるとか、またそれぞれを一堂に会した報告会というようなことを是非年度の終わり、または年度の初めぐらいには公開でやっていきたいと思っております。

ますので、できるだけそういう会には多くの方に参加いただけたらと思っているところでございます。以上です。

柘植座長

ありがとうございます。清水審議官、どうぞ。

清水審議官

連携施策群担当の清水です。まず、広報活動ですが、先日、その広報活動の一環として7月15日に棚橋大臣から「コーディネーターの任命について」ということで記者会見で発表していただきました。これは余り新聞には取り上げられなかったのですが、これを先鞭としてこれからいろいろ広報活動をやってまいりたいと思っております。

それから2番目は、今、本田委員から御指摘のあった重複の排除ということです。正しく言えば、不必要な重複の排除だというふうにおっしゃっていただきましたが、まさにそのとおりで、もともとこれは予算改革というところから出てまいりましたので重複排除となっておりますが、それがすべての目的ではない。それによって全体として優れた成果を生み出すことを目的とするということで前向きに考えておりますので、そういうことを今回、資料1の冒頭の目的に書かせていただいた。

3番目に、今回のこの連携施策群の仕組みの特徴ですが、これはコーディネーターを設置するという点にあると思っております。今まで、内閣府でも府省連携プロジェクトというものがありましたが、これは各省からの施策を束ねるとか、情報交換という段階でしかなかったのですが、今回はコーディネーターがいろいろリードしていく。しかも、コーディネーターと総合科学技術会議の有識者議員のお2人でそれをやっていっていただくということが大きい特徴かと思っております。

それからもう一つは欠落部分、こういう連携施策群全体の目標というものが設置された場合に、各省から出てきたものだけでは不十分ということであればそういうものを補充する。そういう不十分な部分を、少し言葉はわかりにくいのですが、欠落部分と称しております。そういう補充をやっていく。今年こそ10億円くらいの予算ですが、これは今後のこの連携施策の発展によって増えていく可能性があると考えております。

柘植議長

ありがとうございます。ほかの観点からもいかがですか。

では、國井委員、どうぞ。

國井委員

今、コーディネーターの方が今回設置されて解析をしていく施行が新しいというお話がありましたけれども、こういうタイプのプロジェクトが成功するかどうかという

のはまさにそのリーダーによると思うんです。リーダーシップがいかにうまく発揮できるか。そういう点ではこのコーディネーターの方、それからそれをサポートされる議員の方の役割というのは極めて高いと思うんです。

ですから、是非ともリーダーシップを大いに発揮していただいて、またその方たちをサポートする体制というのも非常に重要だと思います。そこを強化しないとこういうタイプのものはいろいろな困難な問題があるかと思imasので、うまくいきません。関係部門でサポートしていただいて、是非ともいい成功事例をたくさんつくっていただきたいと思imas。

柘植座長

ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。議員の方々ももしありましたら、今の國井委員からのまさにコーディネーター、それから担当される議員のリーダーシップの発揮が非常にかなめである。それからそのサポート体制、この2つがキーフアクター・フォー・サクセスと、確かに私の経験からも確信します。

ほかにいかがでしょうか。議員の方々、どなたかございますか。

黒田議員

これまでおっしゃっていただいたことはすごくもっともで、責任が重いものだと思いますし、長らく望まれていたことだと思います。それで、重複もそうですけれども、三浦委員がおっしゃったように何か環境にお金が付くとか、ポストゲノムにお金が付くという、本当はそれにあまり関係ないのに、何かこじつけたようなプロジェクトがいっぱい出てくるというのが研究者から各省庁全部にあることなので、この分野、連携施策群にそのプロジェクトが本当にあるのかという目で見ることが重要であると思imas。例えば、連携施策群にいるのは皆ナノの人だから、ナノを盛り上げるためにはできるだけ多くのプロジェクトを入れておこうよということでは困るわけで、私はそこが重複を考えると同じくらい重要なテーマではないかと思imas。

そして、それは各ワーキンググループだけでは見られないことかもしれない。だから、こういう専門調査会でも見ていただきたいし、ワーキンググループの中にもその中だけの視点を持つわけではなくて、三浦委員がおっしゃった本当にこのプロジェクト、このワーキンググループ、このプログラムに入るものなのかというような視点で、是非見ていただきたいと思imasので、コーディネーターの方よろしく願imasいたします。

柘植座長

ありがとうございます。特にこの第1回は非常に有意義な時間をいただけたと思imas。それぞれの委員の方々からコーディネーターの方、それから今までの御経験に

基づいてこの連携施策群という新しい試みに対してのアドバイスをたくさんいただきました。

後ほど整理をしたいと思いますが、今日御指摘いただいたものはすべて大事なので整理をいたしますけれども、この第1回目で強いてワンポイントだけ一番大事なことを取り上げるといたしますと、私は國井委員がおっしゃった今まさに上流工程にある。この上流工程に時間とリソースを使いなさいといういわゆるホワットの検討ですね。その中に当然アクセプタンス・クライテリアというものを含めたフロントローディング、私たちはフロントローディングという言葉を使っていますが、今ここをしっかりとやるか、やらないかが、私は連携施策群の各テーマが後でがたがたになるか、ならないかという分かれ目だと私は思います。

それ以外に相当貴重な御指摘をいただきましたので、事務局の方で少しこの連携施策のマネジメントの視点を整理してみたいと思います。マネジメントを時間軸上で張り付けることができるのか、あるいはある時間の空間的な張り付けになるかどうか、まだ見えないところがありますが、今日貴重な御指摘をいただいたものを整理してみたいと思います。また専門委員の方々、もしプラスか、あるいははっきり定義しておいた方がいいというようなことがございましたら、事務局の方にいつでも教えていただきたいと思います。

それから、コーディネーターの方々におかれましては、御担当の連携施策群のマネジメント、今日の議論にも出ましたように、毎日毎日の創意工夫が必要だと私は思います。もし相談すべき点がございましたら、折々担当の議員、それから私にも御相談をいただきましたら知恵を共有いたしたく考えます。

当面、8月末の各府省における概算要求に向けて、引き続きワーキンググループ会合等におきまして調整活動をコーディネーターの方々にはよろしくお願いしたいと思います。次回の本専門調査会につきましては、政府の概算要求が終わった後、9月または10月に行いたいと考えておりまして、追って事務局から日程調整をさせていただきます。

本日の議事の概要は、皆様に御確認をいただいた上で公開をすることにいたしたいと思います。

本日は、大変貴重な時間を割いていただきまして有意義な意見交換をいただけたと思います。感謝申し上げますとともに、今後ともまたよろしくお願いしたいと思います。どうもありがとうございました。